K師の重賞本命と見解『ドバイ・阪神・中山』

＜ゴールデンシャヒーン＞
メイダンのダートはアメリカに比べて芝指向。
適性も異なる。アメリカでは実力上位の馬が必ずしも強いわけではない。

ゴールデンシャヒーンは 2016 年以降の人気薄で馬券になった馬の血統も芝指向。

2016 年に 10 番人気 3 着のモラウィジは
父がダンチヒ系のエクシードアンドエクセル。
英国生産馬で米国色の薄い血統構成。

2017 年に 12 番人気 2 着のコミカスは父母父がダンチヒ。
2021 年に 7 番人気 3 着のキャンヴァストは母父がダンチヒ系。
父も欧州の名種牡馬シャマーダルで、アイルランド生産馬。

ダート短距離よりも欧州寄りの芝短距離に強い血統馬こそ注目。

本命は昨年と同じくレッドルゼル。

昨年も解説したように父ロードカナロアは
香港の芝短距離で圧倒的なパフォーマンスをみせた種牡馬。

母父のヴァイスリージェント系も 2017 年、2018 年に連覇した
マインドユアビスケッツの父、2017 年に 2 着コミカスの母父として
当レースでも実績あり。

既に適性は証明済み。フェブラリーステークスからの
ローテーションも同じですが、昨年は使い込んで年明け 3 戦目。

今年はここを目標にして前走が叩き台だったのは明らか。
昨年から上積みを期待。

相手には芝短距離の要素持つノーザンダンサー系を重視。

ミラースは父オアシスドリームが欧州の名スプリンター。
マンジェールは父も母父も欧州の短距離適性高いノーザンダンサー系。
グッドエフォートも父シャマーダルが欧州芝短距離の名血。

アメリカ馬のなかではドクターシーヴェル。
父が日本では芝短距離適性高い馬を出しやすいエルプラドの系統。
このレースへの適性も特に問題なし。

◎10 レッドルゼル
〇8 ミラース
▲7 マンジェール
☆6 グッドエフォート
☆2 ドクターシーヴェル
△総流し

＜ドバイターフ＞
2016 年以降でディープインパクト産駒が 2 勝、2 着 3 回。

日本の芝中距離の主流血統がそのまま走りやすく、
ドバイワールドカップデーの中でも日本馬の活躍が顕著なレース。

2014 年以降では 4 勝している日本馬の戦歴をみると、
ジャスタウェイは前年の天皇賞秋を圧勝。
アーモンドアイはその年の天皇賞秋を圧勝。
リアルスティールはその年の天皇賞秋で 2 着、翌年の毎日王冠勝ち。
ヴィブロスは古馬になってから日本で唯一連対したのが
その年の府中牝馬ステークス。

東京芝 1800m-2000m あたりでも高いパフォーマンスを出せる馬が強い。

日本の血統以外ではフランス寄りの血統。
欧州型のナスルーラ系やキングマンボ、ミエスク、ヌレイエフの血が向いている。

本命はシュネルマイスター。

父は欧州の名馬であり、名種牡馬のキングマン。
サンデーの血を持たない血統ながら日本の主流条件で結果を出している馬。

過去に当レースを勝った日本馬も結果を出していた
東京芝 1800m でも好内容。

直線が長い根幹距離の G1 で先着されたのは
ダノンキングリーとグランアレグリア。

どちらもディープインパクト産駒。

母系には当レース相性の良い欧州型ナスルーラ系の血も持ち、
この舞台の G1 であれば、日本よりもさらに優秀な
パフォーマンスを発揮する可能性も秘めた血統。

ヴァンドギャルドは昨年本命にして 2 着だった時にも解説したように、
ディープインパクト産駒のなかでも母系は欧州強く、
スローペースでタメをきかせた方が持ち味を活かせる馬。

直線が長い 1800m はベスト。
昨年は東京を叩いてからの参戦でしたが、
今年は香港からここに照準を合わせて状態面ではさらに上積みも。

パンサラッサは母父モンジュー、
母母父もイギリスダービー馬を出したハイエステイト。

重厚なスタミナ、馬力血統。
日本でもハイペースで逃げて他馬をバテさせることにより、
中山、福島を逃げ切っている馬。
東京芝寄りの伸びが求められる当レースの適性は低い。

日本馬が実力を出しやすいレースだけに、
海外馬のチャンスは少ないですが、まだ底を見せていないモハーフェス。
昨年の当レース圧勝しているロードノースを評価。

モハーフェスの父フランケルもキングマンと同様に欧州の名マイラー。
他の欧州の種牡馬とは一線を画す適性と高い能力を示していて、
日本でも東京芝など直線が長い G1 で結果を出しているように、
軽い馬場で高いパフォーマンスを発揮する産駒も多い。

イギリス以外で出走するのは今回が初ですが、
血統からはドバイの方がさらに合うタイプ。

ロードノースは適性は既に証明済みですが、
昨年に比べると日本馬含めて相手は強化されているのは不安材料。

他の海外馬でも近走着順が良いサフロンビーチは
時計のかかるイギリスで連勝中だけにドバイの芝では
パフォーマンスを落としそう。

カーネルリアムは父も母父も軽快。
近親はグラスワンダーですが、日本だとダート短距離。
芝でも 1200m 以下で走りそうなスピード血統の米国馬。
このレースでは適性、能力面でも疑問。

◎12 シュネルマイスター
〇9 モハーフェス
☆8 ロードノース
△15 ヴァンドギャルド

＜ドバイシーマクラシック＞

父ドバウィの系統が 2016 年以降連続で馬券圏内に入り、4 連対。3 勝。

ブラッシンググルームやネヴァーベンドのような
フランス的な欧州型のナスルーラ系も相性の良いレース。

日本馬ではワンアンドオンリー、ドゥラメンテ、シュヴァルグラン、
スワーヴリチャードとトニービンの血を持つ馬の好走が目立ち、
それ以外にもラストインパクトなどスタミナ指向のタイプに相性が良い。

2016 年以降で日本馬が 1 頭も
馬券圏内に入れなかったのは 2017 年と 2018 年。

この 2 回は勝ちタイムが 2 分 29 秒以上。
時計がかかって、どちらの年もサドラーズウェルズ系が連対。
スタミナと馬力を要求されたレース。
時計が出る馬場になるほど日本馬にとっては有利。

本命はステラヴェローチェ。

昨年の当レース 2 着だったクロノジェネシスと同じく
当レース相性良い欧州型ナスルーラ系のバゴ産駒。

小回りや上がりかかる馬場で高いパフォーマンスを示した
クロノジェネシスとは異なり、母父がディープインパクトで、
直線が長いコースに適性を示す。小回りの有馬記念、
菊花賞の内容よりも、ダービーで善戦。

昨年のダービーは超高速上がり勝負。
先着されたシャフリヤールはダービーにはベストマッチの血統。
その時に比べれば上がりは出しづらい馬場になり、コース形態自体の
適性も合う今回は逆転の可能性も。

シャフリヤールは当レース自体の適性はダービーに比べると
ベストとは言いづらいですが、時計がかかる馬場にならない限りは
、東京芝 2400m の G1 実績馬が崩れることがほぼないレース。

鞍上の C デムーロは日本の瞬発力タイプに乗せれば
世界最高レベルのパフォーマンス引き出し、ディープインパクト産駒との
相性も抜群。乗り替わりの上積みも大きい。

オーソリティは母系に入るシーザリオの影響強い馬。
ベストは東京芝でも、このレースの適性は特に問題なし。
あとは、逃げ切った前走から間隔が詰まっている影響がどう出るかだけ。

グローリーヴェイズは 7 歳になりますが、
メジロ牝系でノーザンテーストの血も持つ馬。

高齢でもパフォーマンスを落としづらい血統。

スローペースで上がりの速い香港がベストなのは間違いないとは言え、
フランス寄りの血統が走りやすい香港ヴァーズで結果を出していることからも、
適性、能力的にも見劣りせず。

海外馬で面白いのは、ドバイオナー。
父がドバウィと同じく欧州型ミスプロ系のマキャベリアンの系統。
母母父がキングマンボ。

アイルランド生産、イギリス調教馬ながら、重賞 2 勝はどちらもフランス。
2400m 以上は今回が初でも、ドバイの馬場であれば合う可能性も十分。

人気のユビアーは父が当レースでも実績あるドバウィ。
母母父も相性良い欧州型ナスルーラ系。

適性面では良いですが、既に馬場が軽くレベルは低いアメリカで走っていて、
底が知れている馬。
今年の馬場で例年以上に強い日本馬を相手にすると荷が重い。

ユーバーレーベンは父ゴールドシップ。
母系も中山の非根幹距離重賞で好走目立つ馬力寄りな血統。
このメンバーに入ると素軽さや伸びの要素に欠け、
日本馬のなかでは最も低評価。

◎13 ステラヴェローチェ
〇12 シャフリヤール
▲1 オーソリティ
☆4 グローリーヴェイズ
☆11 ドバイオナー
△14 ユビアー
△15 ユーバーレーベン

＜ドバイワールドC＞

メイダンのダートがアメリカに比べて芝指向。

ドバイで行われるダートのレースはゴールデンシャヒーン、
ワールドカップ含め毎年のように有力馬を出走させ、
実力では上なはずのアメリカ馬が必ずしも強いわけではない。

ドバイワールドカップを 2018 年、2019 年と連覇した
サンダースノーの父ヘルメットがデインヒルの系統で
現役時代はオーストラリアで活躍。

2019 年に人気薄で 2 着だった
グロンコウスキーの父ロンロもオーストラリアの名馬。

ドバウィ産駒も 2016 年以降で 6 番人気以下が複数回馬券になっているが、
ドバウィは日本でも芝短距離 G1 で活躍馬を多数出した
シーキングザゴールドの系統。

ダート 2000m の中距離戦ながら、
血統の適性的には芝短距離からマイルの要素が問われている。

また、サンダースノーは欧州芝マイルの G1 でも実績を残した馬。
戦歴的にも芝のスピード寄りな要素があると有利。

本命はリアルワールド。

父のダークエンジェルは欧州短距離の名種牡馬。
母父ドバウィも当レースで実績ある名血。

欧州芝マイルで実績を残している戦歴は
2018 年と 2019 年に連覇したサンダースノーと近い。

サンダースノーとは厩舎、馬主、騎手ともに同じ。

前走のサウジカップはドバイに比べれば
米国指向の持続力が要求される馬場。
本質的には芝指向の当レースとは適性が全く異なり、参考外。

ライフイズグッドはアメリカの現役最強馬。
父のイントゥミスチーフもアメリカのトップサイアー。
父もストームバード系で、米国血統のなかでは芝短距離適性高い馬が
出やすい米国型ノーザンダンサー系。

昨年の勝ち馬も父は米国型ノーザンダンサー系。
ストームバード系のアメリカ馬も 2017 年に人気薄で好走。

過去に当レース参戦のアメリカ馬のなかでは、
母父が同じ 2017 年の当レース勝ち馬アロゲートと近いタイプ。

アメリカ馬のなかでは芝短距離指向のスピードにも優れた馬で、
このレースへの適性に問題なし。

ミッドナイトバーボンは父ティズナウが
日本でも芝短距離の適性高い馬を出すマッチェム、インリアリティの系統。

ティズナウはナドアルシバで行われていた
当時のドバイワールドカップを大差勝ちしたウェルアームドも輩出。

メイダンに移ってからも、要求される適性は
ナドアルシバの頃と大きくは変わっておらず、
ウェルアームドもアメリカではトップクラスと言える実績ではなかった馬。

この馬もドバイで能力を開花できる血統。

カントリーグラマーはアメリカで主流の血統。
前走のサウジカップはアメリカのような持続力要求されたレース。
上積みは疑問。

ハイポセティカルは昨年本命。
今年は昨年以上に強いメンバーですが、当レースに適性ある血統。

リモースは父が当レースも適性高いドバウィ。
血統は向きますが、欧州では長めの距離を使っているように
陣営からスピード不足と見込まれている戦歴が不満。

日本馬のチュウワウィザードは昨年 2 着。

スピードを要求されるレースだけに、
サウジカップから臨んだ昨年に比べて、時計がかかる
小回り 2100m の川崎記念を挟んだ今年の臨戦過程は悪く、
馬の状態もピークだった昨年に劣る。

相手も強化されていて、人気を考えると評価はしづらい。

◎10 リアルワールド
〇7 ライフイズグッド
▲9 ミッドナイトバーボン
☆6 ハイポセティカル
△総流し

毎日杯

過去 10 年の毎日杯が「良馬場以外」で行われたのは 2 回。
いずれも 1-3 着はディープインパクト産駒が独占。

本命はリアド。

前走は最内枠、前詰まると不利が重なりました。
今回は広いコースでディープ産駒が特に力を発揮しやすい舞台。

相手もディープインパクトの影響強い馬。

ドゥラドーレスは近親がディープインパクト。
父もディープインパクトと近い適性を持つ主流血統のドゥラメンテ。

コマンドラインもディープ産駒。全兄のアルジャンナも当レースの 2 着馬。

日経賞

本命はヒートオンビート。

父ミスプロ系のキングカメハメハ。
母は桜花賞馬のマルセリーナ。スピード型のミスプロ系。
タメて伸びる馬なので、近走より鞍上も合うでしょう

相手もミスプロ系で同じキンカメ産駒のボッケリーニ。

アサマノイタズラは母父スピード型。
ミスプロ系のマキャベリアン持ちで父は当コース G1 勝ち馬のヴィクトワールピサ。

タイトルホルダーは母系がサドラーで重厚。
レース傾向からは過剰人気ではあります。